

5

副専攻の紹介：「国際教養教育プログラム」と「地域創造教育プログラム」



原則 6： 人々の国際市民としての意識を高める

原則 9： 持続可能性を推進する

1. 「知の基盤」と2つの副専攻

岩手県立大学では、いわゆる教養教育（リベラル・アーツ）の一環として、「副専攻」という制度がある。学生は、初年次より「基盤教育」科目の履修を通じて教養を培い、大学で学ぶための「知の基盤」を形成していくが、「副専攻」の狙いは、それだけに止まらず、各学部での専門的な学び（主専攻）をさらに広げ、深める機会を提供することである。

「副専攻」のおもな特徴は、①全学部の学生に開かれていること、②「地域創造教育プログラム」と「国際教養教育プログラム」の2つのプログラムから構成されていることである。両プログラムは、それぞれ「地域」と「国際」という観点から世界を理解しようとする実践的取り組みである。各プログラムを修了すると、それぞれ「地域創造士」と「国際教養士」の称号と修了証が授与される。

！ 学びの特徴

1 4つの学位を支える 基盤科目

大学での学ぶ力を作る〈知の基盤〉

大学での4年間の学び、また実社会に活用できるスキルの獲得と資質・能力・身体の育成を目指す。

生きる世界を知る

それぞれの専門領域の知識・技術を活用する場としての「世界」を知ることを目指す。

学問を知る・使う

それぞれの専門領域を学問全体（知の体系）の中に位置づけ、課題解決のための、他学問領域の「知」を活用できることを目指す。

2 主専攻の学びを 更に広げる・深める副専攻

主専攻【各学部の学士教育プログラム】

4学部それぞれの専門分野の学びに付加価値を与える

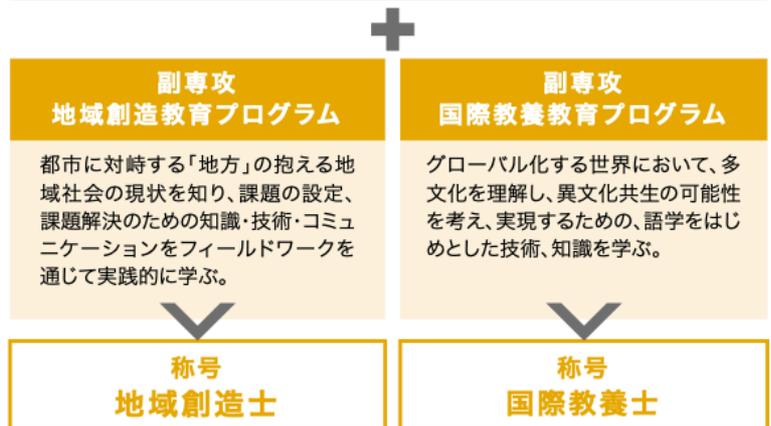


図1：岩手県立大学の基盤教育制度

2. 副専攻「国際教養教育プログラム」

プログラム責任者:

教授 劉 文静、教授 黒岩 幸子、准教授 熊本 哲也、准教授 高橋 英也
講師 大谷 実（高等教育推進センター）

プログラムの内容

2020年度よりスタートした「国際教養教育プログラム」の学びの特徴は、①異文化理解・多文化共生の可能性を探ること、②グローバル社会の課題を検討すること、③多言語の修得を目指す点にある。これらのキーワードに基づき、「コア科目」、「外国語科目」、「グローバル理解科目」、「研修・演習科目」、「キャップストーン科目」という科目群が設置されている。全員必修科目は、初年次に履修する「コア科目」と、本プログラム最終科目である「キャップストーン科目」であり、その他科目については、各科目群の枠内において、各自の問題関心に応じた授業を選択する（選択必修）。例えば、「外国語科目」であれば、中国語・韓国語・ロシア語・スペイン語・ドイツ語・フランス語のうちから、一言語を修得する。

本プログラム最終科目である「キャップストーン科目」では、学生が本プログラムに関連したテーマを設定し、調査研究をおこない、その成果をプレゼンテーション形式で発表する。学生が自ら考え、導き出した見解を表明する機会を設けることで、発表技術を高めるとともに、「国際教養士」の称号に相応しい見識の獲得がなされたかを最終的に確認する。

！ 学びの特徴

本プログラムは異文化理解、多文化共生の可能性を考え、現状のグローバル社会の課題を検討します。また、多言語の習得を目指します。副専攻の全課程（規程単位数16単位）を修了した学生に対し、修了証と『国際教養士』の称号を授与します。



副専攻・国際教養教育プログラムの履修の流れ

● 授業紹介：「グローバル理解入門」

ここでは、副専攻「国際教養教育プログラム」の授業例として、同プログラム「コア科目」の一つである「グローバル理解入門」を紹介する。2020年10月の「グローバル理解入門」では、岩手県出身の映画監督であり、国際舞台で活躍する大友啓史氏を招聘し、「コミュニケーションツールとしての映像」と題する特別講義が開催された。開催の狙いは、グローバルに活躍する人物の話を通じて、国際教養を身につけることである。

大友氏は、近年、インターネットの普及によって映像が身近さを増し、コミュニケーション手段となってきた一方、フェイクニュースなど新たな社会問題が生じてきているとした。そこで、「映像は、いかに作られているのか」といった映像リテラシーを身につけることは、フェイクニュースに惑わされず事実を読み取る力になると、その重要性を強調した。

大友氏は、故郷である岩手県を舞台とした映画『影裏』を撮影している（2020年公開）。『影裏』の原作は、沼田真佑の同名小説であり、同小説は、2017年に日本の著名な文学賞「芥川龍之介賞」を受賞している。映画『影裏』は、中国の映画祭「第2回海南島国際映画祭」へ参加・受賞（ベストアクター：最優秀男優賞）や、台湾で公開されるなど、国際的な関心を呼んでいる。講義において大友氏は、『影裏』や海外でもたいへん人気のある『るろうに剣心』シリーズの撮影において、「ローカル」というテーマを大事にしたこと、日本文化を取り入れそれを突き詰めていくと国際的なものに到達すると述べ、ローカルな事柄が世界の普遍的な問題に迫る手掛かりになることを指摘した。



このように国境を超えて活動する経験をもとに、大友氏は、海外でのコミュニケーションにおける自己表現の必要性と、そのための個性の重要性を説いた。つまり、海外で活躍するためには、所属先に頼るのではなく、試行錯誤しながら個性を発見していくことが重要であり、そのために劇場に足を運んで映画を鑑賞するなどといった「体験」を積極的に積み重ねてほしいと呼びかけ、学生たちを激励した。



3. 副専攻「地域創造教育プログラム」

プログラム責任者：准教授 渡部 芳栄（高等教育推進センター）

プログラムの内容

このプログラムの中心となっている授業が「いわて創造学習Ⅰ」「いわて創造学習Ⅱ」「いわて創造実践演習」である。

「いわて創造学習Ⅰ」は、基礎的な地域学習の方法を学ぶと共に、県内の特定の地域に出向いて、自らの五感を通じて地域資源や地域課題を発見する力を身につけるための授業である。また、地域の方々に対して、自分たちが何を学んだのかをプレゼンすることで、自らの学びを構造的に捉え直す力と説明する力を身につけることも目標にしている。



「いわて創造学習Ⅱ」では、受講生が「いわて創造学習Ⅰ」の地域での学びの企画・運営を担っている。これによって、受講者は「いわて創造学習Ⅰ」で身につけた地域学習の方法や、地域資源・地域課題を発見する力を駆使して、地域の住民とコミュニケーションを取る力や、プログラム全体を見通してデザインする力を身につける。



「いわて創造実践演習」は、このプログラムのキャップストーン科目であり、総まとめの授業である。目標は自ら地域の課題を発見し、その解決に向けた方法を企画し、実行することである。そのため、「いわて創造学習Ⅰ」「いわて創造学習Ⅱ」よりも主体的に地域と関わる機会が多くなる。地域に何度も出向いて既存の資源や問題を見つけ、どのように組み合わせれば適切な解決策となるのかを何度も検証しなければならない。また、「いわて創造実践演習」は半年間の授業だが、この限られた時間の中でその実現まで向かうためには、スケジュール管理も重要になってくる。



4. 2020年度の成果

「いわて創造学習Ⅰ」「いわて創造学習Ⅱ」：

西和賀町・宮古市・雫石町の3地域で現地学習を行った。西和賀町は県内一高齢化率が高い町であるが、その中で掲げている「健幸」（健康と幸せ）をキーワードに病院関係者や移住者の話を聞いた。宮古市では、東日本大震災津波から10年を経た現在、宮古市がどのように地域活性化をしているのかを学ぶために、震災の状況を改めて学び直すとともに、宮古市で活躍している方々に話を聞いた。雫石町では、グリーンツーリズムに焦点をあて、実際に観光業を中心に活躍している現場を訪れ、自らも体験するとともに、地域の方々の思いを聞いた。



現地に赴いての学習は、いずれのプログラム・コースも10月の土日の2日間で行われたが、「いわて創造学習Ⅰ」の受講生は、2日間の学びを自分たちの中で整理し、11月の報告会に向けてわかりやすくまとめ、説明する力を身につけた。「いわて創造学習Ⅱ」の受講生は、「いわて創造学習Ⅰ」の2日間の学びを5ヶ月間かけて企画し、本プログラムが目指す多くの学修成果を得られた。

「いわて創造実践演習」：

2020年度の「いわて創造実践演習」は、盛岡市松園地区において行われた。松園地区は1970年代から1990年代はじめにかけて住宅地として造成されたニュータウンであるが、他の地区と同様に、人口減少と高齢化に悩んでいる。学生たちは2つのグループにわかれて、約4ヶ月間、何度も松園地区に足を運び、松園地区の課題解決に有効だと思われる策を話し合った。両グループとも、既存の統計や地域で実施されていたアンケート調査などをくまなく調べるとともに、地域の方々に何度も話を聞きつつ、自分たちが実際に地域を見て、歩いて感じたことも大切に、それぞれの解決策を考案した。



• グループ 1:

1つのグループは、住民のアンケートから住民が集える場所がないことに着目し、自分たちで松園地区の落ち着いた雰囲気を感じ取り、本をテーマに地域課題の解決を目指した。具体的には、地区内の3箇所に「ブックラック」と呼ばれるお手製の本棚を設置させてもらい、自分たちの力で集めた約100冊の本を配置した。そして、好きなときに借り、好きなときに、3箇所のどこにでも返していいという自由なスタイルの運用とした。

ただ、唯一本を借りる人をお願いしたのは、一言でもいいので、本の感想を書いてもらうことだった。それによって、本を通した地域住民の交流を図ろうとした。約2ヶ月の実装を通して、3箇所の本がどこからどこに移動したか、どのくらい活用されたかなどを分析し、報告書としてまとめた。

• グループ 2:

もう1つのグループは既存の統計資料の調査と、まち歩きを行いつつ、賑わいのある場所や商店街があることに対する住民の否定的な意見や、公共施設の充実度に対する住民の不満足感等の結果を踏まえ、店舗や公共施設について周知・広報することで、その問題を解決することを目指した。そこで考えたのが「地域マップ」の作成で、各自治体や大学等で作成されている地域のマップをいくつか調査した。先行事例から活かせるものは活用しながら、インターネットのグルメサイトなどとは異なる内容を掲載することで、効果的に周知・広報する方法を検討した。その結果、インタビュー形式で店舗の成り立ちやこだわり、おすすめなどを詳細に掲載し、さらに、地区にもともとあった「松園十景」の紹介も兼ねた「松園いいところマップ」という冊子を作成することを考案した。

約2ヶ月間の製作期間を経て、マップは1500部印刷し、インタビューに応じてくださった店舗を含む地域の公共施設や小中学校を通じて配布してもらった。配布後は、インターネット上でアンケートを実施し、良かった点・改善してほしい点をいくつか頂いた。

5. 「いわて創造士」(旧称号)の授与

2020年度は6人の学生が副専攻を修了し、「いわて創造士」(現在は地域創造士)が授与された。授与式で代表あいさつをした学生からは、以下のような言葉があった。地域に飛び込み、住民の方々に関わりながら活動することによってコミュニケーション能力を獲得できたと同時に、地域の課題を捉え、解決するための思考力も得られたように思う。また、それまでは全て一人でやろうとしてきたが、自分の力を信じつつ、仲間を信じ、仲間と共に楽しむこともできるようにもなった。

